

今回の登録美術品について

1 所有者：個人

2 登録日：平成28年8月10日

3 公開美術館（予定）：東京国立博物館（東京都台東区）
※公開のスケジュールは同館において決定されます。

4 登録美術品の概要：

登録 番号	美術品の名称	種類	制作時期	員数	備考
70	しほんぼくがたんさいりはくかんぱくず 紙本墨画淡彩李白観瀑図	絵画	室町時代 (15世紀)	1幅	重要文化財 (昭和51年6月5日 指定)
71	<div> <div>しほんきんじちやくしよくなんばんじんとらいず</div> <div>しほんきんじちやくしよくせかいおよびにほんちず</div> <div>ろつきよくびようぶ</div> <div>ろくきよくびようぶ</div> </div> 紙本金地著色南蛮人渡来図 〈六曲屏風〉 紙本金地著色世界及日本地図 〈六曲屏風〉	絵画	桃山時代 (16世紀末～ 17世紀前期)	2双	重要文化財 (昭和35年6月9日 指定)

【登録番号70】

作品名： 紙本墨画淡彩李白観瀑図^{しほんぼくがたんさいりはくかんぼくず}

員数： 1幅

法量・形状等： 掛幅装， 寸法 130.0cm×34.0cm

制作時期： 室町時代（15世紀）

制作者： —

説明：

本作品は、李白の詩を典拠に、侍童^{じどう}を従えた李白が廬山^{ろざん}の瀑布^{ぼくふ}を望む様子を描いたもので、図の右上に応永・永享期の京都五山を代表する禅僧・惟肖得巖^{いしやうとくがん}（1360—1437）が着賛した作品である。

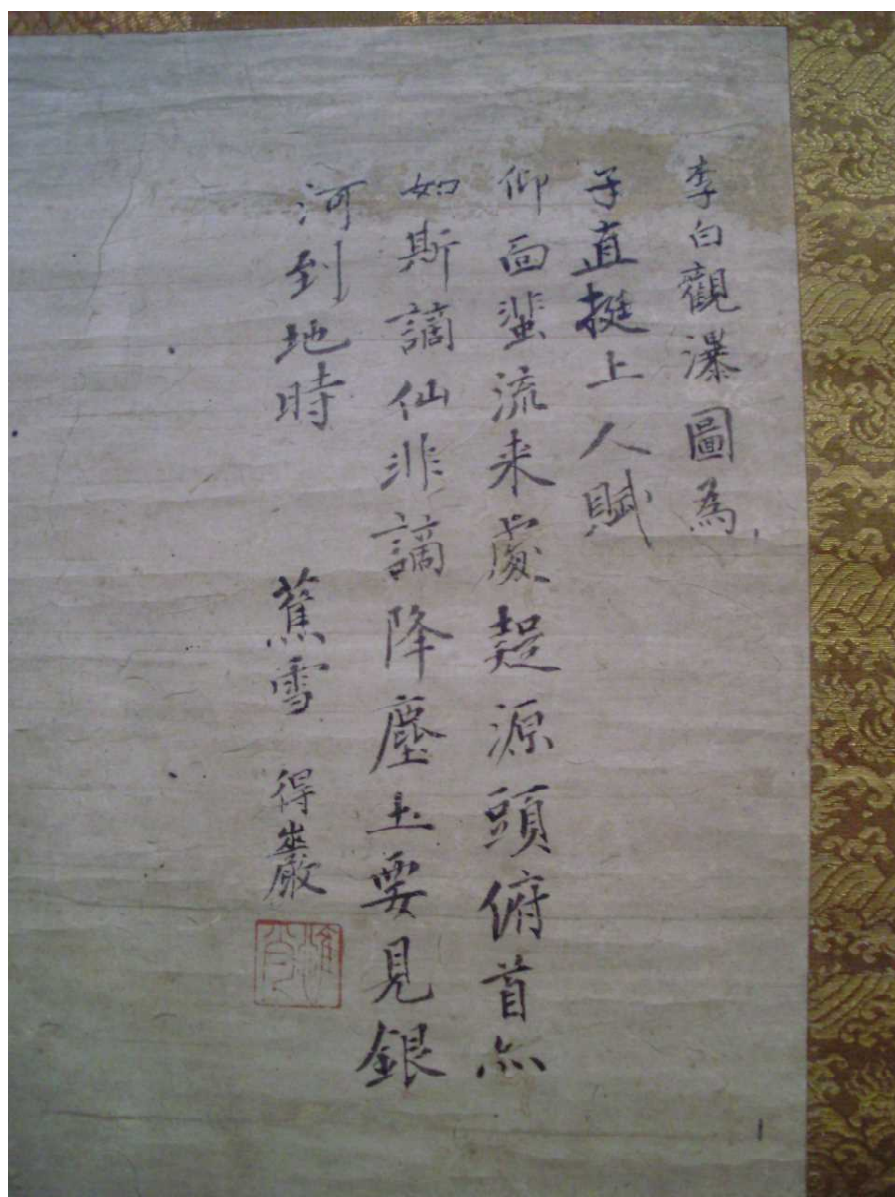
画面の右よりに溪谷の断崖から垂直に落下する瀑布とこれを横切って崖側から屈曲して大きく張り出す松の大木を配す。左隅には、滝壺^{たきつぼ}を隔て岩上に座し、この瀑布を眺める高士（李白）と傍らに立つ侍童を描く。瀑布のあたりには雲煙がたちこめ、懸崖の上方には雲煙がたなびき、その絶え間に遠山と松樹の一端がのぞく。楷体の的確な描写やその画面構成、松樹の表現、岩石の皴法^{しゆんぽう}など、本作品の描写様式は古様なものである。

惟肖得巖は、京都五山文学を代表する文筆僧で、多くの詩画軸に着賛している。本作品の賛には年記はないが、得巖の没年が永享9年（1437）であることから、本作品の成立も同年が下限となる。

観瀑図^{あみ}は阿弥派や狩野派による作品も遺されているが、本作品は、現存最古の遺例として重要であり、室町水墨画の様式展開を知る上で、資料的に貴重な作品である。



(図下部拡大)



(贊部分放大)

【登録番号71】

作品名： { 紙^し本^{ほん}金^{きん}地^じ 著^ち色^{やく} 南^{なん}蛮^{ばん}人^{じん}渡^と来^{らい}図^ず／六^{ろく}曲^{きよく}屏^び風^{ふう} }
紙^し本^{ほん}金^{きん}地^じ 著^せ色^{かい}世^お界^び及^に日^{ほん}本^ち地^ず図^ず／六^{ろく}曲^{きよく}屏^び風^{ふう}

員数：2双

法量・形状等： 屏風装

寸法 南蛮人渡来図／各154.0cm×364.0cm

世界及日本地図／各154.0cm×360.0cm

制作時期：桃山時代(16世紀末～17世紀前期)

制作者： —

説明：

南蛮人渡来図は、左隻に南蛮船と荷揚げの風景、右隻に南蛮人の行列を描いたもので、日本国内の情景のみを一双の六曲屏風に表す。

両隻とも金箔を霞形に貼り、左隻は左三扇にわたり南蛮人多数を乗せた南蛮船を大きく描き、右方海岸には小舟から舶載の品物を陸揚げする光景及び松樹の下にこれを迎える南蛮人を描く。右隻には、左方上部に入り江に停泊する和船数艘を、下方より中央の橋へかけて南蛮人一行の行列、対岸には下方より松林、家屋を経て商店、上部には回廊のある南蛮寺、同門前道路にはこれを迎える宣教師、見物の庶民等多数を描く。

本作品は、緊密精緻な描写で、狩野派絵師の手になると考えられていおり、現存する南蛮図屏風中では古様な図様を示す。

世界及日本地図は、一隻に南蛮系世界図、一隻に日本図を描く一双の六曲屏風である。

世界図は、大西洋を図の中央に置き、中央経線と赤道の長さの比率を1対2とするいわゆる卵形図法で描かれる。円外は金箔を貼り、中央の赤道は緑、赤の縞の線、海は群青、陸は国別に白、赤、緑等に塗りわけ、山脈を緑青で描き、市街を白壁の家で描き表す。また、国名・地名等を記す。海上にはポルトガル付近を起点とする世界一周航路を朱線で表し、その一端は日本の長崎へ到達する。インド洋には一艘、太平洋には二艘の帆船を描く。

日本図は四周に金箔で霞形をおき、中央に大きく日本列島(蝦夷最南端部と本州、四国、九州等)を、向かって左端には高麗の南端を配す。海は群青一色に塗り、陸地は金泥彩とし、各国を平滑な緑の境界線で画し、各地に地名及び郡数を墨書する。山脈は緑青で表し、山城を起点とする諸国への主要道路は赤線で引く。

中世日本に流布した行基図の系譜を引くが、海岸線の形状は屈曲に富んだものとなり、特に九州の地形は、他地域と比較して実際の形状に近い。島しょ部へは航路が朱線で表されるが、豊臣秀吉の朝鮮出兵時に基地となった「名越」(肥前名護屋)付近から壱岐・対馬を経由して朝鮮半島へ延びる航路は、朝鮮出兵の航路と一致する。また異国への窓口として重要港湾であった博多・名護屋・長崎の三都市は地名表記のほか色丸で明示されており、同都市が重要視されていた時代性を示す。

当該世界及日本地図は、秀吉が朝鮮出兵を行った天正20年(1592)を大きく隔てない時期に、来日した宣教師等がもたらした欧州の地理情報をもとに日本で制作されたものと思われる。

こののち江戸時代を通じて多数の地図屏風が作成されるが、本作はその最初期の作例である。

なお、当該世界及日本地図と同様の図様のものに、福井県・浄得寺^{じやうとくじ}所蔵本と福井県立若狭歴史博物館所蔵本がある(ともに重要文化財)。

また本作南蛮人渡来図と世界及日本地図は共に、もと備前池田家に伝来したものであり、慶長5年(1600)池田輝政^{いけ だてるまさ}が織田秀信^{お だ ひでのぶ}を岐阜城に攻めた際の戦利品と伝えられている。

南蛮人渡来図や地図屏風は、南蛮船の来港を機に高まった異国への興味や憧れを背景に、16世紀末から17世紀にかけて多く描かれたが、本作2双はその初期に作成されたものと考えられ、絵画史上、東西文化交渉史上に重要な資料である。



(南蛮人渡来図・左隻)



(南蛮人渡来図・右隻)



(世界及日本地図のうち世界図)



(世界及日本地図のうち日本図)